

年頭のごあいさつ

茨城県知事 岩上二郎



明けましておめでとうございます。

みなさん、いかが正月をお迎えでしたか。新しい年が皆さんにとってよりよい年であることを心からお祈りいたします。

昭和40年は、開発の動きのうえて、また、経済面で波乱に富んだ一年でありました。新しい年昭和41年もいろいろな意味で激しい動きが予想されます。しかし、その動きは、いわば躍動であり、成長を創造し、その可能性を実現する胎動であります。

海は、いよいよ昨年末から中央水路の掘り込みに入りました。いままで海に向つて雄大な防波堤の展開を見せてきた海は、いよいよ内陸に向つてその姿を見せようとしています。研究学園都市もいよいよ土地の取得に入っています。いまこそ県民各位のいつそうの御理解と御協力が望まれるときであります。

今年、農業問題において、中小企業問題においてさらには社会開発の分野において推進しなければならぬ課題がありますが、その美しい点景として、4月には待望の文化センターが完成します。この新しい皮袋の新しい伝統をふまえた薫り高い文化が開花することが期待されます。一方昨年その構想を打出した青少年の熱意はその具体的方向を樹立することになりましょう。光りとみどりにあふれた清潔な空間の中に有識者の知恵を結集した多角的構想を描いてみたいと思います。

とまれ、この新しい年が、県政のうえて輝かしい躍進の年となることを心から祈るとともに私もまた、精魂をこめて奮起してまいりたいと考えております。

新年をむかえて

茨城県企画開発部長 茨城県統計協会会長 児玉実孝



新年おめでとうございます。

統計関係者の皆様には、ここに新しい昭和41年の希望に満ちた新春を迎えられましたことをお喜び申し上げます。

昨年は皆様の絶大なご協力によりまして、各種統計調査、特に国勢調査という国策事業を完遂され、また統計協会の事業も所期の成果をおさめ得ましたことを衷心から感謝いたします。

同時に、わが国の統計は著しい発展を遂げ、行政効果の測定、社会経済開発計画の策定、あるいは経済の予測等、各方面に広く利用されていることは、私たち統計関係者にとって大きな誇りであり、喜びであります。

また、国の内外の諸情勢は複雑多岐をきわめており、国際政情、海外経済の動向が瞬時にして私たちの生活にまで波及を及ぼすような環境の中で国内の経済成長の鈍化、中小企業の経営難、道路交通整備対策、物価上昇抑制問題、住宅問題等、産業、経済、文化、社会面と深刻な問題が山積しております。

また、本県においても、工業の開発と農業の近代化を軸として、各種産業の調ある発展を目指して各種の施策を講じてまいりました。この間鹿島臨海工業地帯の造成、研究学園都市の建設もその緒につくなど、これまで後進県といわれてきた本県の基調も漸く変化してきたとはいうものの、産業、文化、厚生など各般にわり、た福祉茨城のために推進すべき主要課題はなお多いのであります。

このように内外共に複雑、困難な事態に誤りなく対処し、明るい豊かな郷土建設を図るためには、その基礎において、充分統計をそしやく、活用することが必要不可欠であると考えられます。

過去においても統計は、県政および県民生活の各分野において、重要な役割を果してまいりましたが、今後も礎となる存在として、県民各位のご理解とご協力をいただきながら、本県の発展、県民福祉の向上に役立つよう力を尽くしてまいりたいと存じます。

どうぞ統計関係者の皆様には、近代社会における統計のもつ意義と使命をご理解ねがつて、研さんにつとめ、統計が社会における比重を高められますようご努力いただき、本県統計界の発展のためご自愛のうえ、一層のご活躍を望みますようお願い申し上げます。



1996年を迎う

全国統計協会連合会会長

大内 兵衛

また新しい年が来ました。

わたくしは小さいとき、新年が来ると親父が紙をのべて、小さいわたくしの手をおさめて「万里同風」とかかせました。書きぞめというのですが、この行事のうちに、昔の親の子に対する愛情と、昔の日本人の平和に対する祈願がこめられていたのでしょう。

ことはわたくしも77才をすぎました。

みなさまのご親切のおかげで全く静かな幸福な晩年ですが、新年が来ると、ことしも日本も世界も平和であつてくれと願わずにはいられません。

しかし、ことしが、そのように無事で平穏な年であり得るかどうか。疑わしい点が相当に多いように思います。とふばヴェトナムを中心とする東南アジア、それをさしはさんで、インドと中国とのにらみあい。どうも安心はできません。アメリカは益々軍備をととのえています。そのため幾分かインフレが進行して景気がいいといいますが、これに対して日本では、高度成長はいよいよ行つまり、どの方面を見ても恐慌の様相がすさまじいように見えます。たとえば、物価。これは昭和40年度8%の上昇ではすみませんでしたが、41年度は米も、鉄道運賃も、学校の授業料も、社会保障の負担も少なくとも15%、多いところでは25~30%もあがると思いますから、物価を通じて、とくに消費者物価が15%くらいではおさまるか、むつかしいものでしょう。そうなると、国民の生活はどうなるでしょう。賃金引上の運動はどうなるでしょう。それに対する資本の反撃はどうなるでしょう。

われわれ統計マンは直接にはこのような不合理には責任はありません。責任をもつべきは、物価決定を支配する力をもっている資本家にあり、それについて、その方針を与える責任のある政府でしょうか。それでも、そういう人々に統計という資料を提供する役目をもっているのはわれわれです。そこで、やつぱり、こういう好ましくないことがあまり起らないように希望しないではいられません。

そういう不景気な話はさしおいて新年にはおめでたいことが多いことでしょう。むかしならば、若水をくんで手水をつかい、馬にのつて初詣をしました。お宮の松もきれいに飾られてそれにはおしめがはられていました。お座敷には、鏡もちがかざられ、お庭には娘の子が赤い手がらで羽子板をついていました。いまはこういうことはどうなつていますか。

わたくしはお正月でも年末でも全く同じような生活です。日向ぼつこをして本をよむことが出来る年よりははやくはあります。ごあんしん下さい。

のびのびの訳稿あれど小春哉

本年も諸君のご清福をいのります。もし秋までも生きのびていて、神戸の全国統計大会でお目にかかれたらごなうれいでしょう。

昭和41年への期待

行政管理庁統計基準局長

後 藤 正 夫

謹んで新年をおよび申し上げます。

統計の再建がはじめられてから20年目の年を迎えました。統計を闘鶏と間違ええられたり、統計大会に出席するのを闘鶏大会に出席するのだと思われたりしたころのことを思い出して、誠に感深いものがあります。

各省がそれぞれの統計を作成するのを、行政管理庁統計基準局が調整しながら統計と統計制度を改善発達させようとしたのは、アメリカ、イギリス流の統計行政の仕組みにならつたわが国の統計行政のやり方は、第一次吉田内閣のときに大野博士を委員長とする統計制度改善に関する委員会の答申にもとづいてつくられて今日にいたりしました。各省が統計を作成することは、それぞれの行政の需要と結びついた統計をつくれるという大きな利点がありますが、行政管理庁のような役所にあつて、しかも調整について二つの特別法をもつていても、なお調整力が弱いために、統計がだまらぬように大きくなつたり、各省間の統計の均衡がとれなくなつたりするのを防ぐことがなかなかむずかしいということをつくづく感じます。

今日の日本の統計は、国際的に見ておそらく最高のレベルにあります。それは統計の種類や数の上からばかりでなく、質や精度の上からも言えることだと思ひます。社会の組織機構が複雑となり、その速度が早くなると、

書にわたつて新しい良い統計が整備されることが、政治を行うためにも、行政を運営するためにも、企業を
るためにも望まれることは申すまでもありません。しかし、国の財政、統計を作成する組織機構、あるいは
画からも、たくさんの統計をつくるということに、おのずから限度があります。ここに統計の総合調整のむ
きがあると思います。よくフランスでは作られている統計は少いけれども、作った統計を実に上手に利用し
ても使い易いように示しているということをきくに付けて、日本には統計が多すぎるために使うのに迷つて
てはいただろうか。そして使う目的にびつたりと当てはまらないと、びつたり合致する別の統計を作ろうと
るのではないだろうか、考えることさえあります。このことは府県で統計を作成され、あるいは統計を利用
り調整したりされている方々にも、思い当ることがあるのではないのでしょうか。それについても第一次吉田内
とき、もしも一つの機関がすべての行政部門の統計を一元的に集中して作成するカナダ、オランダ、西ドイツ
な行政規模の大きくない国々、またはソビエトとその他の共産主義諸国のような権力国家のような統計の仕
をとおつていたならば、わが国の統計はどんな姿になつていただろうかと考えることができる今日のごろです。

統 計 と 丙 午

田 中 文 司

丙午といわれる年、ひのえうまなどといつても
い人達はピンと来ないかも知れないが、60年に
つてくるこのウマは、どうも女性にはすこぶる人
あばれりまでである。

伝説や迷信はいろいろあるが、この丙午も、男
はまことに縁起よい年らしく、この年に生れた
は縁起的で、行動力があり金と女に縁があるなどと
る反面、女は7人の男を喰い殺すなどといわれ、
は大海にした八百屋お七もこの年生れだつたと
たような伝説は、前世紀のおとぎ話的なものでは
らうか、このような話は、昔の人が、自分の周囲
ことなどを基にして作つたことで、これに宗教
こともからんで人の口から口へとまこととやかに
られ現代に伝わっているもので何等科学的な根
つていないわけでもないと考えられる。

11月の世界へ届こうという科学の時代に、いまさ
でもあるまいと思うが、世のお年寄りには、まだこ
を真剣に考えて女の子をいみきらう人が案外に
らうて、今年は子どもを生まない方がよいなどと考
活したりしているようでもあつて、若い世代の人
に意見の相違などから種々の話題を提供している。
においてすら、まだこんな迷信を信じている人が
たら、この前ひのえうまの年、すなわち明治39
はさうであつたらう。日露戦争が終了し、大勝利
に響つてこの頃として考えられることは、こ
に迷信信者が多く、考い方もいたつて単純で幼稚
らうからこのひのえうまを巡つてあれやこれや
はされ女の子を生んだ若いお嫁さんなどは随分と
を感じこれともなつていろいろと家庭悲劇を生
ことではないかと想像される。しかしところでこの
られた女の人が不幸になつたということは聴いてい
むしろ普通の家庭人として幸福な生活を送つて
ものと信じている。

このような迷信が当時の統計のうえにどのよう
まわっていたか、明治39年の県統計書からさぐつ
ることによろ。

この当時の県総人口は1,231,229人であつたから昨年
の国勢調査人口にくらべると59.9%が本県に住んでいた
ことになる。この当時の教育程度は、中学卒業以上が4.7
%、高等小学校卒業38.2%徴兵受検者で全体の42.9%程
度しかない。また出生率は非常に高かつたらしく現在の
約半分強の人口に対し、出生は現在と同等あるいはそれ
以上の数字が表わされている。すなわち別表1による出
生数は明治38年36,752人、39年31,176人、40年37,614人
となりそれ以後も毎年増加している。これを昭和38年出
生数36,113人、同39年36,422人にくらべてもわかるとお
り当時は現在の倍以上の子供を創つていたことになり、
いかに生めよ殖やせよの時代であつたか、またその時代
の生したすべてがいかにかのんびりとしたものであつたか
推察されるところである。

ここで、ひのえうまの明治39年の出生が他の年に比べ
ると極端に減つていることがわかる、明治38年にくらべ
15.2%の減、40年にくらべ17.3%も減つていることにな
る。つぎに明治39年出生数を月別に、その前後の年とく
らべてみると別表1のとおりとなる。

この表にみられるとおりの明治39年は、38年、40年にく
らべて男100人に対する女の割合が、1月を除き各月とも
減少していることで、特に、11月、12月はその割合が低
くなつている。その反面に38年の12月が非常に高く、40
年の2月から4月にかけて女子の出生率が高くなつてい
ることが目につく、これから考えられることは丙午をき
らつて、その年に生まれた女の子を前年生れにして届け
るとか翌年の出生にして届けたのではないかと思われ
る。もちろん人間の生殖本能はひのえうまだからといつ
て、そう簡単に中止出来ないだろうし、現代のように計
画出産、育児制限とかいつた考え方や行動は、当時の軍
国主義万能むしろ国力増進のための人的資源として生め
よ殖やせよの時代であつたと思われるから、この統計に
表われている数字から判断すると、戸籍上の届を早くし
て前の年へ、あるいは遅くらせて翌年の生れとして届け
られたのではないか、あるいは水にしられたり、闇に葬

表1 明治38年～40年月別出生数

男	女	別	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		計	36,752	3,675	3,372	3,953	3,104	2,672	1,920	2,283	2,444	3,041	2,905	3,140	4,243
		男	18,523	1,935	1,682	1,916	1,522	1,364	1,015	1,210	1,254	1,545	1,473	1,620	1,987
		女	18,229	1,740	1,690	2,037	1,582	1,308	905	1,073	1,190	1,496	1,432	1,520	2,256
		男100に 対し女	98.4	89.9	100.4	106.3	103.9	95.8	89.1	88.6	94.8	96.8	97.2	93.8	113.5
		計	31,176	3,341	2,721	3,078	2,305	2,426	1,762	2,047	2,202	2,806	2,823	3,130	2,886
		男	16,747	1,667	1,423	1,603	1,204	1,136	963	1,106	1,191	1,511	1,546	1,752	1,540
		女	14,429	1,674	1,298	1,475	1,101	990	799	941	1,011	1,295	1,277	1,378	1,346
		男100に 対し女	86.2	100.4	91.2	92.0	91.4	87.1	82.9	85.0	84.8	85.7	82.6	78.6	72.3
		計	37,614	3,963	3,717	4,387	3,088	2,888	2,236	2,484	2,415	2,907	2,924	3,317	3,288
		男	18,848	2,027	1,728	1,926	1,440	1,434	1,196	1,337	1,307	1,504	1,527	1,752	1,600
		女	18,766	1,936	1,989	2,461	1,648	1,454	1,040	1,147	1,108	1,403	1,397	1,565	1,688
		男100に 対し女	99.6	95.5	115.0	127.7	114.4	101.3	86.9	85.7	84.7	93.2	91.4	89.3	92.3

(資料 茨城県統計書第 編)

り去られた可哀想な赤ちやんもいたのではないかと考えられるところである。

このことは明治35年から5か年間の出生数および男女比についてみていえることで、別表2のとおり39年のひのえうまの年を除き出生数は増加の傾向を示しており男100人に対する女の割合の推移をみても、明治41、42年が平常の年と考えて男100人対女95人前後と推察されるに対し、38年の98.4、40年99.6と異常に高く、39年の、86.2は極端に低いことになる。

さらに前年対比増減率をみても、平常の増加率は41年6.0%、42年4.7%と5%前後と思われるに対し、38年10.6%、40年20.7%とその増加率が異常に高くなつておる。さらに、ここ数年来増加を示してきた出生が39年には前

年より5,576人(15.2%)の減を示していること、かひのえうま生れがいみきらわれていたかを表すものであろう。

また、このことは結婚にも相当影響していると思われる。別表2結婚数をみると、出生同様年々増加するのに、39年だけが減少をしていること。これは子を生むということを嫌つて、若しその年に子どもが生まれたらといったことで結婚を見送つたのではないかと推察される。それは、明治40年以降の結婚数が大分減つてきていることからわかると思う。結婚数は減つてはいるが、この年以後においても出生数は依然として増加を続けていて、この年だけの結婚の減少はあまり影響しなかつたのではないかと推察される。

表2 男別別出生数および結婚数(明治38年～42年)

茨城県統計書

男	女	別	明治38年	明治39年	明治40年	明治41年	明治42年
		総数	36,752	31,176	37,614	39,868	41,714
		男	18,523	16,747	18,848	20,398	21,474
		女	18,229	14,429	18,766	19,476	20,240
		前年対比	3,454(10.6%)	-5,576(-15.2%)	6,438(20.7%)	2,254(6.0%)	1,871(4.7%)
		男100人に対し女	98.4	86.2	99.6	95.5	92.3
		結婚数	8,693	8,205	9,409	10,505	11,500

以上のように、ひのえうまがいかに当時の人々から嫌悪されたか、数字がそのことを物語っている。このように古い統計は、ひとりひのえうまのことばかりでなくその時代、時代の世相とか背景を数字によつて忠実に表わしているのであつて統計はただ単に数字として眺めるのでなくその当時をうかがい知るいろいろの要素を含んでいて、古い数字を眺めていると先人達の歩んできた思想とかくらしの有様が推察されて興味深々たるものがある。

前のひのえうまの年から60年、いま、世の中はこの間にももの凄い発展をみせ高度化へ前進し、なお、人知は尽

きるところを知らず無限に成長していこうといふ今更ひのえうまでもないだろう。元来子とか丑をつたえとは時刻や方向を表すために作られたもので、子はねずみ、丑はうしと呼びかえられる。童話的な感じも深く迷信の根拠ともなるようになっているようにも思われる。

現代に生きる若者達よ、古人の言い伝えを盲信にたつて判断し、科学時代に生きる喜びをおぼやう。年もどんどんと子どもを生み、60年前のようにならないうちに計上に表われないように祈るものである。

(県統計課広報資料)

県内産業の展望

(その 14)

—大正年代のまとめ—

県統計課 横須賀 弘

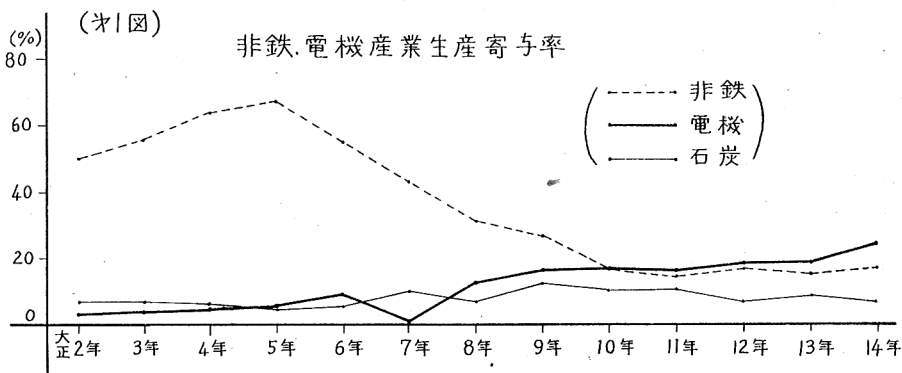
大正時代に大正年代を第1次世界大戦を境にしてお話
てありますが、明治年代の産業構造は製糸業・
の輸出依存度の高い軽工業が中心領域を占め、
の回化や産業連関があまりみられなかつたのであ
これは、明治年代から大正はじめにかけての産
は孤立的な、あるいは政策的な性格をもち、輸入
原料に依存する産業の発展は孤立的に発生し
た。製糸業・綿紡績等のような比較的早く発達し
があつても、それが安価な労働力に依りて農村
して立地されたので他産業によつて形成された工
には大きな影響を及ぼさなかつたのであります。
、当時の県内の工業地帯の分布をみてみますと
域では高萩を中心とした石炭産業、日立市の非鉄
、県央における石岡地方の醸造業、そして古河地域
業が挙げられましよう。
こうした当時の古河地域における製糸業の発展は、群
、栃木・茨城の養蚕生産地帯の一翼を占め、しかも安
の労働力の供給源でもあつたわけでありませう。
しかし、上述のとおり生糸業等をもつ地域は地域的に

も孤立的な存在であり、これに対し織物などを中心と
した足利・桐生等などについてみますと、それら地方小
産業都市が形成され中小織物工業地帯の発生をうながし
今日に至つているのであります。

では、こうした輸出軽工業の発展に対し、他産業の県
内における工業地帯形成の下地が全然育成されなかつた
のでありませうか。

明治初年から国内にはすでに官営工場の設置により、
東京・大阪などにはぼつぼつ工場の集中が現われていた
のでありますが、これが工業地帯らしくなつたのは日清
戦争以後であるといわれ、さらにそれが本当の近代的工
業地帯として姿を完成したのは第1次大戦以後とされて
おります。

すなわち、県内においても日立市の電機産業の発展も
この時代を契機として大きく飛躍したわけでありませう
こうした地域別工業地帯形成の過程を山本正雄氏著「日
本の工業地帯」のなかで次のように説明してあります。
「東京、大阪などが……本当の近代的工業地帯として姿
を完成したのは第1次大戦以後である。北九州における

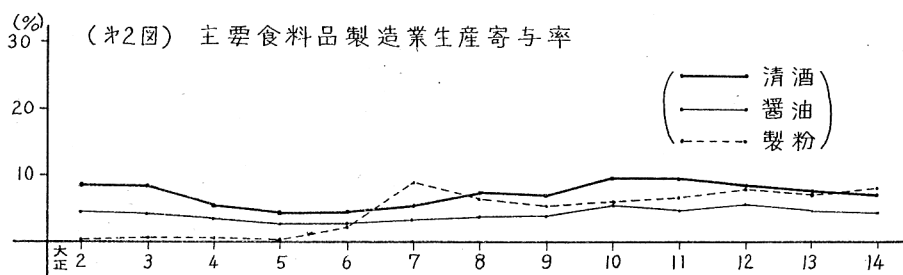


主要工場の設立年表をみても、明治28、9年ごろから工業地帯形成がはじまつているが、中京では、少しこれより地帯形成がおくれている。……」

「このほかに、財閥を中心とした大傘田、新居浜におけるコンビナートの工業都市の形成も、やはり日清日露戦争のころから胎動し、それが第1次大戦後に確立したといえよう。これに似た同一資本系統による工業都市の形成が、旧日産系の日立市、旧日室系の延岡市、宇部興産などによる宇部市などもこの傾向といえる。さらには同じころか、呉、佐世保、長崎、徳山などの軍工廠を中心にして軍事色の強い工業都市も形成された。」

このようにして誕生した日立地域の工業地帯の産業構造のなかからも大きな変遷があつたのであります。

第1図は、県内総産額を100.0%とした場合の各産業の寄与率（構成比）であります。このうち、日本鉱業関係の非鉄産業の生産額についてみますと、大正2年時には県内総生産額の50%を占めていることが分ります。



現在でも製造業に属する各種産業のうち「食料品製造業」の地位はかなりの比重を占めておりますが、大正年代の食料品製造業の中核はなんといつても清酒・醤油等の醸造業でありましょう。第2図はこうした食料品関係産業の経過を示したものでありますが、第1図と同様その構成比をみてみますと、大正10年の9.8%を最高として大きな起伏もなく経過しており、上述の石炭産業とも

そして、大正5年の66.8%を頂点に減少が続けていることがよく分ります。当時の国内の経済情勢については詳しくお話しましたので、ここでは省略いたしますが、第1次世界大戦という大きな動乱に当該産業も大きな影響を受けたことは事実でしょう。

反対に、日製系列の電機産業についてみますと大正2年は県内生産額に占める割合は2.9%にすぎなかつたのが、大正8年の12.9%を契機に上昇傾向にあることさきの非鉄産業と好対照としてみる事ができます。

また、石炭について一応製造業の枠外産業ではあつたが、当時の主要県内産業の一つであることには異論ありません。したがって参考までは常磐炭鉱地帯の生産についてみますと、大正2年は6.5%、ついで大正5年の4.9%を底辺に大正14年は6.5%とほとんど横ばいを続けており、このことは当時の産業として一定の安定性のつたことがうかがえます。

とも安定した地盤を確保しているとみる事ができます。また、この産業のうち製粉業についてみますと大正年代の中頃から急激に大きな上昇がみられます。これは日清製粉の工場施設の拡大等によるものと見られます。次号ではこうした食料品製造業を地域別に詳しくみてみましょう。(以下次号)